

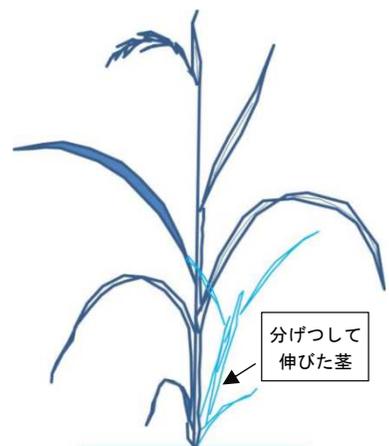
“出穂茎” に養分を

春の光エネルギーを感じ取った草花たちは、一斉に芽生えてきます（萌芽）。チモシーも他の草には負けじと活発に生育し始めます。



チモシーのひとつの特徴は、萌芽から幼穂形成の頃に窒素の吸収が盛んになることです。必要十分な窒素を確保したチモシーは有穂茎が増え、

その結果 1 番草の収量増加へとつながります。有穂茎とは穂の出る茎のことですが、これはめったに使われる用語ではありません。いつれ穂を出す茎ですから、むしろ「出穂茎」と言ったほうが分かりやすいでしょう。対して穂をつけない茎は、葉をつけて光合成を行い、草全体に養分を供給しますから「栄養茎」です。いずれの茎も主茎から分裂（分げつ）し、形成されます。



これは「さあこれから大きくなろう」という初期生育の段階にあるチモシーが自身の球茎に十分な養分があると、なるべく穂を多くつけることで自分の種子を多く残せるチャンスが増大させようとすることによると思われます。しかし球茎に養分が足りていないと、新たな出穂茎を増やすだけの余力がありませんから、結果、収量が低下へとつながることになります。

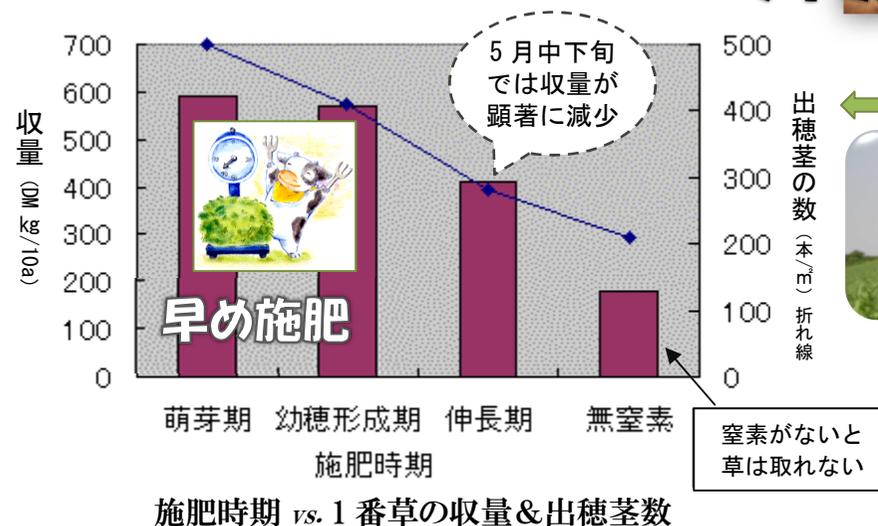


チモシーがそこそこ成長し、早春施肥のタイミングが遅くなってしまうと、分げつからの

出穂茎や栄養茎の生育はそれほど期待できなくなってきます（下図）。同じ肥料・同じ施肥量でこのように収量が違ってくるのですから、仕事のタイミングは収益性を高めるための要所であると言えるでしょう。



タイミング



スラリー散布

肥効が早いスラリーも窒素の供給源としては有効ですが、窒素含量はものによって大幅に差があり（右図）、一度に大量に散布すると草が徒長し、軟弱になってしまうこともあります。また一般的にカリ含量が高いので、大量散布した草地の草は乾乳牛には給与しづらいものになってしまいます。

水分	87~99%
窒素 (N)	0.3~2.2kg
リン (P)	0.2~1.4kg
カリ (K)	0.8~4.7kg

スラリーは 5 月中旬までに程よい量 (1~2 t/10a) を散布するのが大切で、これまた散布が遅くなると、窒素肥料の効果が低下するばかりか、草の中の硝酸態窒素が高まり、またスラリーが牧草に付着したまま 1 番草が収穫されると、膨大な“腐れサイレージ”が出来上がってしまいます。



ちなみにチモシーの分げつの形成は、春先よりも“収穫された後”の方がはるかに活発です。そのため球茎を痛めない刈取高さ(8~10 cm)の確保、そして速やかな追肥(収穫 10 日以内)などが次年の収量に強くインパクトを与えていると言えるでしょう。

